

「協同的な学び」を引き出すための音楽活動 —子どもの「音への気づき」に着目して—

植 田 恵理子

従来から、幼稚園における音楽活動は、協同的な学びが重視されてきた。筆者は、「協同的な学び」を引き出す実践や、子どもたちが、その環境作りに対して積極的に取り組むための条件などに対し、これまでも事例研究を行い、考察と提案を行ってきた。本研究では、大阪府S市S幼稚園をフィールドに、音楽活動の事例の中で見られた園児の様子を「協同的な学び」と子どもの「音への気づき」の関連性において考察した。共に音を聞きあう活動や、音を工夫することによって得られる「気づき」を確認する活動などを繰り返すことにより、子どもたちは、音楽を共有するコミュニティを大切に、音楽活動を楽しく行える環境を作り、整える力を発揮していった。筆者は、子どもの「音への気づき」を大切にした音楽活動が、「協同的な学び」を引き出し、共感しながら学んでいくために必要な環境を、子どもたちが意欲的に作りだすきっかけになることを明らかにした。

キーワード：協同的な学び、音楽活動、コミュニティ、気づき

Cooperative learning has been valued in kindergarten music activities for some time. The author has been investigating and making proposals with regard to the classroom practices that bring out 'cooperative learning' and the conditions in which children contribute actively in creating such an environment. In the present paper, the children were observed during music activities, focusing on the correlation between 'cooperative learning' and 'children's sounds awareness' in 'S' kindergarten in 'S' city, Osaka. By repeating activities such as listening to the sounds they made together or confirming the 'awareness' obtained by making the creative sounds, the children were observed to have come to value the sharing of music in a community, and to create an environment in which they can enjoy music activities, positively contributing to organizing such activities. The author demonstrated that the music activities that place importance on 'sounds awareness' brought out 'cooperative learning' that inspired the children to create an environment necessary for learning while sharing togetherness.

Key words : cooperative learning, music activity, community, awareness

はじめに

幼稚園における音楽の実践には、合奏・歌遊び・リズム遊びなど様々な活動がある。そのなかでも、クラスの友だちと協力し、楽器・声などを使用して音を重ねることを楽しみ、活動の中で生まれる葛藤・共感などから「協同して学び合う体験」を目的とした音楽活動の重要性が指摘されている。

加藤（2005）は、自己内対話能力¹⁾を基礎に、仲間同士で目標や価値を共有しながら、協同して活動を展開していく点に5歳児保育の課題があるという。また、個人のレベルで自己内対話能力を獲得した子どもが、集団で共有した目標や価値に向かって協同して活動を展開していくことを通し、新たな「学び」の世界を開いていくことが重要だと述べた上で、5歳児の保育がベテランも新人の保育者も「うまくいかない」という悩みが深刻になって

久しいという。加藤はその原因を自己内対話能力の未形成・歪みの問題として捉え、この課題に対して、「協同的な学び」を組織していくことで応え、『「見つける・気づく・考える」力を育てるー学びの基礎を培う生活から』という研究課題にもとづいた実践を紹介している²⁾。

筆者も、園内研修の場などで、加藤が指摘する、「誰にも関わらず活動する子ども、自分の思い通りに他の子が動いてくれないと、きつい言葉で他者に働きかける子ども、すぐに手や足が出てしまい、意志の疎通がうまくいかない子どもなどの存在³⁾」を教諭から聞き、自らも指導の中で、そのような子どもたちと遭遇している。筆者はこれまでも、色々な立場の子どもたちの個を生かしながら、遊びの中で深めた学びを協同的な学びにつなげていく経験を就学前にしておくことが、小1プロブレム⁴⁾をはじめとする、小学校の諸問題に助力することを園内研修の場などで発表してきた。そして、クラス全員が積極的に参加し、無理なく同じ方向を目指して活動にいそしみ、自然に全員が同じ目的のもとに活動する等の「協同して学ぶ」ことを大切にした音楽活動を提案し、自らも実践に携わってきた。実践の中で、子どもたちは、音の出し方・聞き方・重ね方などを他者とのやり取りの中で試行錯誤し、その感じ方や方法の違いを認識する。また、協同して考えあうことが音楽活動を深め、更に新しい音の発見につながっていくことを体感する。さらに、子どもたちは、音作りのために他者とコミュニケーションを重ねるなかで、音への感じ方の違い・音の出し方の工夫に興味を持ち、音作りに関連する様々な問題を、協働して解決することを経験する。このような段階を経て、「省察すること」を体験した子どもたちは、自分の考えを顧みて、音の出し方を工夫・決定することを繰り返し行う。この経験こそ、自己内対話能力を磨き、上記した加藤の研究課題である「学びの基礎」（見つける・気づく・考える力）を育て、5歳児保育の課題に役立つと考える。

本研究では、子どもが積極的に交流し、助け合いながら創造的な活動を行うことを目的とした実践を事例として紹介し、活動の過程で見られた子どもの「音への気づき」が、音楽活動を深め協同的

な学びを引きだすこと、「学び合うコミュニティ」の構築に、園児が積極的に協力するきっかけになることを明らかにする。

1. 協同的な学びを大切にした音楽活動と「音への気づき」

保育の現場では、「学び合い、支え合う」ことを意識し、協同的な学びにつながる音楽活動が必要だと筆者は考える。全米乳幼児教育協会の21世紀の乳幼児教育プログラムによると、3歳から5歳のための発達にふさわしい実践の章に、すべての子どもと大人が、自らが受け入れられ、尊重されていると感じるような、学習者の学び合い・支え合う共同体の創造が奨励されており、その保障により、子どもは、他者との人間関係を構築する方法などを学び、社会のなかで生きていく能力と知識を身につけると記されている。また、ふさわしくない実践として、共同体という集団意識を身に付けさせる努力が何もなく、クラスの秩序を守るために、子どもを友だちから隔離し、おしゃべりをさせないことや、クラスの中でよい人間関係を結ぶように援助されていないなどが挙げられている⁵⁾。

筆者は、園内研修における現場教諭の質問内容などから、幼稚園におけるクラスの秩序を守るために、学び合うことと支え合うこととのバランスが悪い音楽の実践が、少なくないと感じている。例えば、歌唱指導の際、いつまでもふざけている子どもがいれば、指導者は注意をしたり、隔離するなどの手段を取り、クラスの中でよい人間関係を結ぶ配慮からは程遠い処置を取らざるを得ない場合がある。遊びの中で学び・支え合う姿勢を育み、園児全員が楽しめるような音楽活動の指導方法を望む声は多く、園内研修のテーマになることも頻繁にある。

注意や隔離などの方法は、学ぶ環境を保障し、学び合うためのルールを体得するという意味では、やむを得ない場合もある。しかし、社会性が著しく発達する幼稚園の時期には、ふざける子どもも含めて、全員が楽しめる音楽活動を推し進めることが必要であり、園児一人ひとりが「全員が納得

して参加できる方法」を粘り強く考えるように指導者側が援助や指導内容を工夫することが必要だと考える。学び合い、支え合う共同体の創造に園児が力を発揮するような音楽活動は、個が気づいたことを集団の中で生かす術を知り、より良い人間関係を作る方向に活動を促す。すなわち、見つけ、気づき、考えたことを他者と共感するうちに、子どもたちは、自らが学ぶ力を身に付けるだけではなく、心地よい人間関係の中で学び合うことを体得し、加藤の言う、学びの基礎を培う生活の基盤を作る。このようにして培われた共同体の中で、子どもは協同して学ぶことを知り、その過程においては、たくさんの「気づき」(発見)が生じる。

子どもが「気づき」を発表する行為に対して他者が共感したり、「気づき」の変化をとともに見守ってくれたり、粘り強く考えて「気づき」に関連する問題を解決してくれるなどの経験は、「気づき」を尊重されたと思う気持ちを刺激する。その経験が更に次の発見につながり、自己内対話能力を高め、協同して学ぶことに積極的な姿勢が育まれる。前述した歌唱指導を、協同的な学びを意識した実践にするためには、全員で「ふざける」ことを生かして歌える歌を探し、「ふざけて歌う表現」を歌の中で生かす方法を見つけ、方法を実践した結果生じる「音への気づき」に共感し合うことが、協同の学びにつながると考える。

例えば、「おなかのへるうた」(作詞：阪田寛夫 作曲：大中 恩)という曲があるが、曲を対話調にして、クラスの半数の子どもたちは斉唱し(①グループ)、残り半数は、音程のない台詞に変化させて歌う(②グループ)ことが可能な歌である。この歌の場合、②グループの園児全員が笑いながら語ったとしても、真面目に問いかけている①グループと、笑いながら台詞を返す②グループによって曲調が変化し、面白くなる。このように、ふざけた歌い方も工夫次第で「音程のない効果的な台詞」になると園児が認め、歌を楽しくする一演出方法だと気づかせ、ふざけている園児側も、表現を一工夫し、受け入れてもらうことを考えるように指導者が導くことが大切である。同時に、方法によっては、ふざけて歌うことによって面白い効果が出る歌、正しい発声で歌うことがふさわしい歌の存在

を知り、区別し、その違いに気づき、他者とともに表現方法を考えるように促す実践こそ、協同的な学びを大切にしたい音楽活動になり得ると考える。

このように、各々の「音への気づき」を指導者が大切に、共同体の中で育むことにより、協同的な学びの基盤ができる。「音への気づき」は、協同的な学びの基盤を作るうえで、重要な要素であると考えられる。

2. 「音への気づき」を支える要素

「音への気づき」を支えるためには、子どもたちの共感・対話・良好な人間関係が不可欠であると考える。佐藤(1999)は、他者との対話は方略や行為の思考を深化させるとして、対話による協同学習は重要な取り組みであると述べている⁶⁾。音楽活動においては、子どもたちが自分の発見(「音への気づき」)したものを大切に、認めてくれる仲間に見せ、共感したいと思う心が、他者との更なる接触を起し、そこでの対話によって、より発見した音を工夫しようという気持ちが刺激される。共感を得られない場合は、発見した音に対し、時間的な推移とともに興味が薄れることも考えられるが、反面、新たな共感を得ようと方略を変えることも予測され、興味を継続することや、新しい「音への気づき」を生み出すきっかけになることも考えられる。他者との対話によって、より面白い音を探そうとする気持ちを刺激され、協力して発見し合うことが、自分だけでは得られない経験や「音への気づき」を生み出すことに気づき、互いの興味を喚起し、協同で学習する姿勢が培われる。

対話は共感を引き出し、共感から良好な人間関係が生まれ、その中で「音への気づき」を共に喜び合うことにより、子どもは他者とともに音の変化を楽しみ、発見した音に対して創意工夫する姿勢を身につけていくことが予想される。すなわち、対話は共感を引き出すことにより、「音への気づき」の探究に意欲を起ささせ、良好な人間関係は「音への気づき」を見守り、工夫することを促し、協同的な学びにつながるように活動を深めていく。以上から、対話は共感を得て、「音への気づき」の探求の意欲に、良好な人間関係は、「音への気づき」の

工夫と活動の継続に深く関連し、活動を続けていく過程において子どもたちの新しい「気づき」を支える。

3. 「音への気づき」に対する指導者の留意点

保育の現場では、子どもが何かを発見（気づき）すると、それを人に見せたり、聞いてもらおうとする様子がよく見られる。また、消極的で、他者に話すことをためらう子どもも、周囲の大人が気がついて褒めてくれたり、共感されたり、喜んでくれたりする経験を経て、新しい発見に積極的になる。指導者は、音楽活動を行う際、子どもが「音への気づき」を活動の中で経験できるように留意して環境を整えるべきである。例えば、手作り楽器を作る音楽活動では、一見音作りに関係のないような素材を準備し、園児に「どのようにしたら楽器に使用できるか」を質問してみたり、場所によって響き方が違うことを一緒に体感したりするべきである。

また、個々の中で納得するまで「気づき」に対して考えることを促すことが望ましい。人によって騒がしい音も、当人にとっては心地よい音である時は、どうしたらよいのか、音を工夫してグループの誰もが納得する出し方を考えるように、対話を持たせるように促すことが大切である。見つけた音を友だちに演奏（表現）して見せたり、一緒に音を工夫する経験を通して、学び合い、支え合う「協同して学ぶ」気持ちを刺激するような声かけを行うだけではなく、それによって創造的な活動が活発になり、音楽的な成長にもつながるよう導くことが大切である。

ドロシー・T・マクドナルド&ジェーン・M・サイモンズ（1999）は、4から5歳児のための音楽経験として、この年齢の社会的意識の芽生えを考え、保育室内の楽器で遊ぶなどのグループ活動や、声・自然・楽器のひびきなどの個人的な探求のための機会などが、創造的な音楽的成長を助長する基盤を提供するという⁷⁾。この知見をもとに筆者の考えをまとめると、楽器の特性を知り、生じる音を注意深く聞き、その変化に気づき、確かめるといった個人的な探究を重ね、次にグループで刺激し合っ

て「音への気づき」を深めていくことで、子どもたちは主体的に音の創造に関わり、協力して音や音楽を作っていく姿勢を身につけていく。その中で生じる様々な「音への気づき」を指導者が引き出し、グループで工夫するよう促す音楽活動は、音楽的成長を促すだけではなく、社会的意識を刺激し、協力して学ぶ姿勢を支え、助力すると考える。

「音への気づき」を引き出す音楽活動は、音楽的成長にとっても、協同的な学びにとっても重要であり、「音への気づき」に十分な時間をかけて探究する機会と環境を与えることは、協同的な学びの基盤を子どもたち自身が整えるための最初のステップになる。指導者はそれを理解した上で、適切な言葉かけをし、「音への気づき」を引き出すことが必要である。

4. 「音への気づき」とコミュニティ

(1) コミュニティの役割

ここで言う「コミュニティ」とは、異年齢・ジェンダー・支援が必要などの様々な条件を越えて園児が助け合い、他者と共感しながら活動を楽しめる環境を組織し、何かを媒体とした遊びを深めていくことによって生じる共同体を指す。

「はじめに」で記したような、意思の疎通がうまくいかない子どもたちに対しては、自分の表現や気づきを保障され、自己内対話能力を磨く場であり、活動に協力的な子どもにとっても、他者を認め、様々な人間関係を学んでいく場であることが望ましいと考える。若林（2008）は「協同学習が他者の考えを聞き自らに問いかけることで、粘り強く問題解決に向かい、問題解決方法および自他が共存する人間関係の営みをも学ぶ場となっているといえる」⁸⁾と述べている。また、寒河江（2009）は「遊び」から「協同的な学び」への移行について、前者は「子どもたちが単に仲良くしたり、一緒に活動したりする」ことであり、後者は「それぞれの自分の意見を発表し、お互いに意見を交換する。それを活動に移すための準備を行う。すなわち、同じ目的を持ち、すべき活動を分担し、念入りに話し合い、試行錯誤しながら同じ目的を達成するために活動する」ことであると述べている⁹⁾。

寒河江は、単なる遊び活動と協同的な学びが感じられる活動とを区別している。全員で活動をしていても、一緒にいるだけで、各々が好き勝手に遊んでいるだけでは、協同的な学びには発展しない。意志の疎通がうまくいかない子どもも含めて、それぞれの「気づき」を生かす方法を試行錯誤するうちに、目的を定め、共に考え、学びながら活動していくことを体得するのである。そこで生まれるグループは、知恵を出し合って問題を解決していく共同体となり、4-(1)で記した、若林の言うところの「自他が共存する人間関係の営みを学ぶ場」になり、筆者の言うコミュニティの定義になり得る。

コミュニティは、協同的な学びに必要な姿勢を学ぶ場として重要な役割を持ち、様々な立場の人間が、活動の目的を定め、良好な人間関係を保ちながら活動を深めていくことを経験する場として機能することが理想的である。

(2) コミュニティと「音への気づき」

筆者は「音への気づき」を支え発展させる場としての、(1)で記した「コミュニティ」を、音楽活動の中で子どもたちが自発的に創っていくことが大切だと考える。個人の活動だけでは得られなかった、音の広がりや体験（音を他者と重ねることによって、新たな響きが生まれるなど）、素材を工夫して音に変化をつけるなど、アイデアを交換し、ともに考えるうちに、子どもたちは協力して音の探求活動を進めることに熱心になり、新しい発見を安心して発表できる場を維持しようと協力的になる。すなわち、自分の表現を受け入れられ、「音への気づき」が尊重される場の構築に対して、積極的な参加が行われると考える。

例えば、合唱や合奏を、クラス内の歌遊び・楽器遊び活動で終わらせず、子どもたちが、他クラスに出張演奏に出かけたり、逆に招いたり、異年齢の子どもたちに教えるような活動にまで発展させると、発表するために必要な様々なアイデアを交換し、相談する必要がある。楽器の選定・音の出し方などを、クラスで何度も話し合い、それぞれが「音への気づき」に基づいたアイデアを提案し、クラス全員が真似するところから始まっ

て、全員が納得するまで工夫し、演奏方法を定めていく。「人に聞かせる」というクラスの目的のもとに、活動を推し進めるうちに、コミュニティは子どもたちの真剣で積極的な姿勢に助けられて強固なものになっていく。

コミュニティが「音への気づき」を共に喜び合う良好な人間関係を育み・保障する場として機能した場合、子どもたちが自ら望んで、コミュニティの構築に力を注ぐことが予想され、その結果としてコミュニティの土壌が固まれば、子どもたちは、共に学ぶことを自然に受け入れ、協同の学びが連続して行われることになる。以上から、協同的な学びを支える環境作りに対し、子どもたちが自発的に関わるためには、「音への気づき」を生かす場としてコミュニティを整えることが大切だと考える。

5. 事例と考察

ここでは、S市S幼稚園において、担任教諭が行った音楽活動時の子どもの様子から、「音への気づき」と「協同的な学び」の関連性について考察する。筆者はS幼稚園において、「協同的な学びを大切にする音楽活動」をテーマに、2009年から園内研修で助言を行ってきた。今回の事例は、2011年3月31日から3回の園内研修を経た後、担任教諭が一ヶ月に渡り、実施した音楽活動の中から二つの場面を抽出した。

期 間：2011年6月から7月までの約一ヶ月間

対 象 児：S市S幼稚園さくら組（4歳児12名、5歳児15名、計27名の異年齢混合クラス）主に5歳児に焦点を当てて、分析・考察を行う。

観察場所：さくら組の教室

観察方法：約一ヶ月間に行われた「かえる合唱団」の実践を、園長か園長代理がすべてビデオ録画する。

課 題 曲：かえるの合唱

分析方法：収録したビデオの中から、子どもたちが活動に主体的に関わっており、協同的な学びが見られると園長・園長代理・

担任教諭が判断した部分を抽出し、その中から「音への気づき」と「協同的な学び」の関連性が見られると筆者が判断した部分をさらに抽出した上で分析・考察する。なお、事例に登場する園児の名前は、すべて仮名とする。

(1) 事例1 かえる合唱団(2011年6月8日の実践より)

さくら組全員が2グループに分かれて、かえるの合唱の輪唱を楽しみながら、かえるになりきってジャンプした後、さとしが「二番あるかもしれないよ」と言う。教諭が「二番ってどんなの?」と聞くと、年長児全員が口々に「かえるのうたが聞こえてこない」などの替え歌を作り出した。教諭が各々のアイデアに対して、「聞こえてこないんだ」などと相槌を打つと、「聞こえてくるかな?」に歌詞を変化させたり、意見を口々に言い合う態度が見られた。アイデアを披露しない、あるいは他の園児の様子を見守るだけの園児もいたが、「聞こえてこないのは、おかしい」と批評する・アイデアに対して頷く・拍手をするなど、思い思いの表現方法で参加する姿勢が伺われた。伸びをして興味がなさそうに見える園児もいたが、誰かがアイデアを発表する時は、すぐに座り直し、顔の向きを発表する園児の方に向けていた。

教諭がまさしを呼んで、全員の前でアイデアを発表するように言うと、まさしは「かえるのうたが、きこえてこない、んんん(ハミング)ゲロゲロゲロゲログワグワグワグワグワ」と歌った。さとみが、(かえるの声が)聞こえてこないのだから、「ゲロゲロ」のところもハミングにするべきだと言い、他の園児からも活発な意見が出た。歌の半分はひそひそ声で歌うなど、子どもたちは、新しいアイデアが提案されるたびに、演奏方法を全員で歌って確認し、それについて話し合いを重ねた。最後は、声をひそめて歌うなどの静かな活動も多かったが、全員が歌い方や替え歌作りに積極的で、活動に関係のない遊びをする園児は見られず、真剣な表情で参加していた。

・事例1の考察

この事例では、さとしが「二番あるかもしれないよ」と言ったのをきっかけに、クラス全員が替え歌作りに意欲的に挑戦し、様々なアイデアが生まれ、それを全員で実践してみることに、個々の「音への気づき」が生まれている。最初は、各々のアイデアを言い合うだけだったが、次第に、教諭のアイデアに対する相槌や、確認するような声かけに対して反応し出し、時間の経過とともに、他者の「音への気づき」に対して意見を言うようになった。教諭は、アイデアを実践し確認する流れの中で行われる園児たちとの対話、園児同士の対話の中から、「音への気づき」が引き出されるように声かけしていた。子どもたちは、教諭の相槌を参考に、替え歌の歌詞の意味を考え、声の出し方を歌詞の内容に沿って変化させ、それを聞いた他の園児が、また新しいアイデアを披露するという活動を繰り返した。

次の段階になると、他者の「音への気づき」に対して、園児たちが感想を出し合い、部分的に歌い方を変更するなどの方法を打ち出すようになった。園児たちは、納得したり、変更点を提案することに積極的になり、言葉による「音への気づき」の発表→実践による確認→個々の新たな「音への気づき」の誕生→納得や感想を言葉にするという流れが定着し出した。実際に歌ってみると、それほど効果的ではない方法もあり、それらは発表者本人も異論を唱えることなく自然淘汰されていった。この段階になると、園児たちは、誰かが「音への気づき」を発表する時や、部分的に変更する場合は、協力して静かにするようになり、教諭は調整するよりも、見守ることが多くなっていった。

まさしが、歌い方のアイデアを園児全員の前で発表した際、「んんん」のハミングの箇所、ほぼ全員の園児が笑いだした。この後、多数の園児から「グワグワグワグワグワグワゲロゲロゲロゲログワグワグワグワグワ」の部分をもどくように歌うかについて活発な意見が出され、提案を全員で実践してみる行為が何度も繰り返された。園児たちは、単に個々のアイデアを主張するだけではなく、まさしのアイデアをさらに効果的にするための方法(歌の最後まで、ハミングで歌う)を提

案した。まさしの「音への気づき」を尊重しつつ、部分的にアイデアを加えようとした活動が長く継続して続けられたこと、また、まさしの「音への気づき」をきっかけに、声に強弱をつけたり、かすれ声やサイレントシンキング（声を出さず、心の中で歌う方法）などの音の変化を楽しみだしたこと、まさしへの「笑い」は嘲笑の笑いとは種類を異とするもので、まさしが考えた「音の工夫」に対し、全員が好意的に受け入れることを示したもので、まさしが考えた、歌詞の文脈に沿った音の工夫は、他児の「音への気づき」を刺激したと、その後の園児の行動から考えることができる。

また、はじめのうちは、自分のアイデアを主張するだけの園児や、伸びをして、違う方向に視線を移している5歳児もいたが、時間の経過とともに、視線が意見を言っている園児の方を向き、座りなおして聞く態度が見受けられた。また、活動の終盤は、ほとんどの歌がサイレントシンキングによるものとなり、声がほとんど聞こえない状態で全員が身体を歌に合わせて振るわせて歌っている状態が続き、協力して静かな状態を続ける様が見られた。この段階では、喋る園児は見受けられず、それぞれの「音への気づき」を生かし、替え歌作りに対して真剣に臨んでいた。

まさしがアイデアを発表したあと、子どもたちが騒然となるほど様々な意見が提案されたのは、まさしの歌い方に対し、対話と実践の中で共感が引き出され、それぞれの園児に「音への気づき」が生じ、その探究に対する意欲が高まったのではないかと考える。この場面は、2. 「音への気づき」を支える要素で記した、「音への気づき」を共に喜び合うことにより、子どもが発見した音に対して創意工夫する姿勢を身につけ、他者とともに音の変化を楽しむ」と合致し、「音への気づき」をきっかけに、他者のアイデアを尊重しながら、自らの気づきを広げ、そこから協同して学ぶ姿勢が生まれている実践的な例とすることができる。また、この活動では、個々のアイデアの自由な主張から、「音への気づき」の交換・共感・部分的な共感を繰り返し行うことによる「音への気づき」の連鎖が行われ、クラスが一つの共同体となり、共通の目標（この場合は、クラスでかえるの合唱の替え歌を創

り上げる）のもとに創作活動を行っている。自然淘汰されたアイデアを提案した園児も、他の園児が納得していない様子を感じ取り、アイデアに工夫を重ねて再度提案するなど、全員が納得することを望む姿勢が感じられる。また、活動の終盤で、全員がサイレントシンキングを行う頃には、立ち歩いたり喋る園児が一人もいなくなり、全員ができるだけ身を寄せ合って静かにするなど、協同して静けさを作るために、ルールを守ろうとする態度が伺われる。この場面では、「音への気づき」がきっかけになって、コミュニティの中で受け入れられる方法を探す、あるいは、コミュニティを維持するためのルールを守るなど、コミュニティの構築に対する子どもの積極的な態度が引き出されている。

以下は、さくら組の園児が作ったかえるの合唱の替え歌である。(1番は原曲の歌詞)最終的に3番までの3つの替え歌が作られ、替え歌の歌詞の意味や、その順番についても話し合いが行われた。

1. かえるのうたが きこえてくるよ グワッ
ワッグワッグワッ
ゲロゲロゲロゲロ グワッグワッグワッ
ワッ
2. かえるのうたが きこえてくるよ グワッ
ワッグワッグワッ
さよならさよなら グワッグワッグワッ
ワッ
3. かえるのうたが きこえてこない (続きの部分は歌わない、いわゆる『口パク』で歌う)
4. かえるのうたが きこえてくるよ グワッ
ワッグワッグワッ
みんなでみんなで グワッグワッグワッ
ワッ

(2) 事例2 かえるの合唱団の発表(2011年6月13日の実践より)

かえるのうたを題材とした活動を、さくら組が毎日行っていると、その練習を聞いていた隣のクラスである「すみれ組」が、聞かせてほしいと言ってきた。さくら組では、いつ・どこで・どのよう

に歌うのかについて話し合いが続けられたが、子どもたちは、並び方（二列で歌う）・舞台の作り方（台を使って、前列は背が低い人、後列は背が高い人が立つ）・演奏方法（輪唱を取り入れる、二回歌う）・進行（「これから歌います」と司会の台詞を入れてから歌う）・演出（二回目に歌う時は、前列と後列を入れ替える）など、細部にわたって様々な意見交換があり、クラスで協力して「かえるの合唱」を見せることに強い意欲が感じられた。

・事例2の考察

この事例では、言葉こそたどたどしいが、まるで、小学校の意見交換が活発に行われている学級会のような光景が繰り返されていた。例えば、教諭が、歌の始まりはどうするのか尋ねたり、歌の出だしがそろわないかもしれないと問題提起すると、子どもたちは、「これから始めますと言えばよい」「誰が言うの」「前の列の人」「みんなが言えばよい」などの意見を出し、教諭が合図するまでもなく、積極的な園児が音頭を取って、声をそろえて歌い出しの台詞を言っていた。教諭が口を出そうとしても「わかった、そうしたらいいね」など友だちとの間でやりとりが終結し、教諭が蚊帳の外という場面もあった。教諭は、きっかけを作っただけで、ほとんど出番がなかったという。他にも、細かな問題について教諭が尋ねるが、園児たちは、自分たちで解決していった。始めのうちは、この年齢では言葉が巧みな一部の子どもたちが引っ張っていき、いわゆる「仕切る」状態になっていた場面もあった。しかし、教諭が進める「園児たちの気づきを大切にし、様々なアイデアを全員で実践して確認する方法」に慣れてくると、活動に消極的な態度で臨んでいた子どもたちも、自分の方法でやってみたい、新しい歌い方を思いついたから聞いてほしいという態度に変わってきた。また、積極的な園児が意見を言う時に、別の積極的な園児が自分の「音への気づき」や演出方法を主張し出すと、活動初期では、人の意見を聞かず最後まで自分の言いたいことを言う態度も見受けられたが、活動の終盤では、一旦黙って意見を聞き、反論のないときは頷くなどの態度を見せるようになった。この段階では、さくら組一人ひとりが、個

の「音への気づき」から生まれた歌唱方法を、クラス全員が納得する歌い方に変えることに賛同しており、「すみれ組に見せる」という最終目的のもと、全員で見せるためのアイデアを粘り強く考えることができるようになってきていると言える。

かえるの合唱では、子どもたちがそれぞれの出した声の面白さなどに気づき、その気づきを他者に伝え、全員で真似をすることによって、「音への気づき」を確認・納得することを時間をかけて繰り返すことにより、活動を深め、目的に向かって問題を解決しながら、ともに考える活動、すなわち協同的な学びに至る活動を、子どもたちが協力して推し進め、クラスというコミュニティの基盤を固めている。クラスで一つの替え歌を作り、それを隣のクラスの前で発表するという目標を全員が把握し、クラス単位で創造活動を進めることが、コミュニティ作り（学び合いの場の環境作り）への積極的な姿勢につながったと考えられる。この姿勢は、他者と目標や価値を共有しながら、協同して活動を展開していくという5歳児の課題に十分応えていると考える。

6. おわりに（考察にかえて）

上記のように、「協同的な学び」の中では、コミュニティ構築に至る過程において、多様な子どもの気づきや、その変化が見られ、子ども自身が音を見つけ、大切にし、音の変化に気づき、それを周囲に伝えあい、納得する行為を連続して行うことが、音楽活動における「協同的な学び」につながっていくと言える。その為には、各自が「音への気づき」を多数体験するような実践から始め、発見したことを交換しあう場を設けることが大切である。また、音素材への更なる興味、音を重ねることの面白さに興味を持つように、グループで音を考えたり、聞き合うような実践を、音楽活動に限らず、日々の保育の中でも保育者が構成的に盛り込み、発見したことを人に聞かせたいという気持ち刺激し、コミュニティを育む力を子どもから引き出していくことが大切である。音への興味が継続的になり、活動を深めていくようにコミュニティが機能すれば、子どもたちは遊びの中で学

び合う楽しさ知り、その構築に積極的になると考
える。

筆者は、子どもが様々な音の響きをグループで
聞き合う機会や、音の探索を十分に行うことが可
能な環境を準備し、グループで演奏に興じる過程
で生じる「音への気づき」を個人から引き出し、グ
ループで共感できるように広げていく活動こそ、
子どもの社会的意識を刺激し、協同的な学びを大
切にした音楽活動であると考え。今後は、一部の
「仕切る」園児が、納得して人の意見を聞けるた
めの経過と条件を更に考察し、「協同的な学び」を音
楽活動に取り入れる具体的な方法を探っていきたい。

謝辞

本研究を実施するにあたり、園ぐるみでこの研
究を支えてくださった、吹田市立千里新田幼稚園
の野牧政子園長先生、宮前知子園長代理、中村紀
子前主任、喜田啓子教諭、福山望教諭、保護者の
方々、子どもたちに心から感謝申し上げます。

注

- 1) 加藤繁美+秋山麻実編著(2005)「5歳児の協同的学びと対話的保育」ひとなる書房 p.7 加藤は、アンリ・ワロンの自我形成論に依拠し、「自我」と「第二の自我」とをつなぎながら自己決定していくことが「自己内対話能力」だと記している。
- 2) 前掲注1 pp.7-9
- 3) 前掲注1 p.12
- 4) 小学校に入学したばかりの児童が、授業中に立ち歩いたり、教師の話を開けないなど、学校の集団生活に適応できない状態を指す。
- 5) NAEYC(全米乳幼児教育協会) S. プレデキャンプ+C. コップル(2000)「誕生から小学校低学年にかけて乳幼児の発達にふさわしい教育実践—21世紀の乳幼児教育プログラムへの挑戦—」東洋館出版社 p.223
- 6) 佐藤公治(1999)「対話の中の学びと成長」金子書房
- 7) ドロシー・T・マクドナルド&ジェーン・M・サイモンズ(1999)「音楽的成長と発達—誕生から6歳まで—」溪水社 p.76
- 8) 若林紀乃(2008)「幼児の向社会的行動における協同学習の可能性と事前学習のあり方」『幼年教育研究年報』第30巻 p.62
- 9) 北野幸子/角尾和子/荒木紫乃編著(2009)「遊び・生

活・学びを培う教育保育の方法と技術—実践力の向上をめざして—」北大路書房 p.96

参考文献

- ・ ジョンソン, D.W./ ジョンソン, R.T./ ホルベック, E.J. (2010)「学習の輪 学び合いの協同教育入門」二瓶社
- ・ 菅道子(2010)「子どものための参加型音楽プログラムの構成要件—ロンドの理解を目指した<音のサンドウィッチをつくろう>を事例として—」『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』第20巻 pp.105-113
- ・ 無藤隆(1997)「協同するからだことば」金子書房
- ・ 小笠原勇美(1995)「自己表現の育成としての音楽学習」『岩手大学教育学部研究年報』第54巻第2号 pp.153-164
- ・ シルビア・チャード(2006)「幼児教育と小学校教育の連携と接続—協同的な学びを生かしたプロジェクト・アプローチ—実践ガイド」光生館
- ・ 角尾和子(2008)「プロジェクト型保育の実践研究—協同的学びを実現するために—」北大路書房

資料：S 幼稚園の指導記録「かえる合唱団誕生まで」

月日	子どもの活動	子どもの様子	教師の思い、援助
6/1	○カエルの歌を歌う。 ・休符の部分で、カエルジャンプをする。	・高くジャンプすることを楽しんだり、友達とタイミングを合わせたりしながら、歌うときはカエルになって歌うようになった。 ・4歳児はカエルジャンプが楽しく、自由に好きなときに跳ねていた。	休符を意識させようと思ったが、やっぱり4歳児は難しいな。「カエル」で歌う事を楽しもう！
6/8	○4・5歳で見合いっこをする。 ○歌の続きを作る。	・リズムや友達の存在を感じている5歳児と、自分が楽しんでいる4歳児の姿が見られた。 ・ダウン症のK児も楽しそうに、表現していた。	年齢によるリズムの捉え方や動きはこんなにも違うんだ。まずは表現する楽しさを感じられるようにしよう！
6/10	○カエルの鳴き声を作る。 ・空き箱、ペットボトルのふた、輪ゴム、カップ、割り箸などの廃材を利用する。 ○輪唱する。 ・子ども達の歌を教師が追いかけて歌う。 ・2グループに分かれて歌う。	・5歳児が考え、始まった替え歌作り。 <u>言葉の意味や声の出し方に変化をつけ、友達の表現を見て「～したら？」と考えていた。</u> ・話を聞く場面では関心をもちにくかった4歳児も歌うときになると一緒に表現し、パフォーマンスを楽しんでいた。	友達の思いを聞いて考えて欲しいな。小さなつぶやきも逃さずに、クラス全員に言いたい気持ちを伝えていこう！
6/13	○カエルの鳴き声を作る。 ・空き箱、ペットボトルのふた、輪ゴム、カップ、割り箸などの廃材を利用する。 ○輪唱する。 ・子ども達の歌を教師が追いかけて歌う。 ・2グループに分かれて歌う。 ○4歳児に見せる。 ○すみれ組に見せる。 ・いつ、どうやって見せるのかを相談する。 ・舞台や客席など、会場を作る。 ○カエル合唱団 発表会 ・輪唱をする。	・音作りの経験から、素材を組み合わせて、こする、弾くなど鳴き声のイメージに近づけようと工夫していた。 ・音にこだわって、鳴らしかたを考え「これは怒っているとき」と場面を決める子どもや、自分だけの「鳴き声」を作っていた。 ・教師が何をしようとしているのかわからずに戸惑っている子どももいたが、繰り返して歌うと、理解し歌う順番を交代してやりたいと楽しんで歌っていた。 ・どのタイミングで歌うのか、先のグループの声を真剣に聞いていた。 ・5歳児はやる気満々で歌い、見せていたが、4歳児は「輪唱」がわからず、きよんとしていた。 ・同じ子どもではあったが、 <u>どうやってすみれ組に聞いてもらうのかを自分達の言葉で話していた。</u> ・並び方や舞台の作り方、お客さんの場所など教師の問いかけに誰かが反応し、「見せてあげよう！」という強い意欲が見えた。 ・自分達が考え進めてきた活動なので、自信をもって「見せる」ことを楽しんでいて、達成感や満足感も見られ、この後も友達同士で輪唱を楽しんでいた。	イメージしやすい音だから、表現しやすいだろうな。 素材を工夫して自分だけの「カエルの声」を見つけて作って欲しいな。 友達の声を聞くこと、一緒に歌う楽しさ、追いかける(追いかける)楽しさに気付いてほしいな。 合唱団の企画、運営を友達と一緒に、できるだけ自分達で進めていってほしい。その中で、友達の思いにも耳を傾けられたらいいな。 クラスの友達と自信をもって、パフォーマンスを楽しんで欲しい。自分の表現でいいんだよ。

考察

- ・5歳児を中心とした表現活動になったが、4歳児にも「表現する楽しさ」「友達と一緒に活動する楽しさ」は、十分に伝わっていたように思う。一部の子ども達が、引っ張っていくような形になったところもあったが、パフォーマンスすることに少しずつ抵抗がなくなり、恥ずかしさよりも「自分もやってみたい！」「思いついたから見て！」と自分から表現を楽しめるようになってきたと思う。
- ・かえる合唱団の取り組みでは、自分達の成功感、満足感が自信に繋がり、「誰かに見せたい」という気持ちに発展し友達と共有することができたのであろう。そして、企画運営を自主的、積極的に進める事が出来たのだと思う。

- ・どこにでもある「音」に対して柔軟に反応するようになり、叩く・振るという音の出し方からこする・弾く・組み合わせるなど、音の出し方に変化が見られた。また、小さな音に対して敏感に反応し始めている。

出所：S 幼稚園の指導記録（作成者：担任教諭）より

※事例に取り上げた活動、子どもの様子は下線部分である。

